

Series

もうひとつの まち 都市 の中へ 3

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より



Profile

松本コウシ Koshi Matsumoto

1961年広島生まれ。

大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。

夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」

「ウイークエンド」、「記憶への旅」、「肖像権」などの著作がある。

日本写真家協会・日本写真協会会員。

青の竜舌蘭を捜せ

アオリュウゼツラン、聞き慣れない名前かもしれませんが。というのも、おそらくはほとんどの方が、この植物のことを巨大化したアロエだと誤解しているようなのです。

American Aloeとも言うそうですが実はアロエ科ではなく、通常Century Plant(百年植物)と言われるリュウゼツラン科に属するこの植物は、百年にたった一度だけ(実際は30~40年周期で)茎を5メートル以上も伸ばして花を咲かせ、その労力のため自らが枯れてしまう、なんと刹那的な植物なのです。同じ種の中で、テキーラの原料になるものもあるそうです。

このメキシコ生まれのアオリュウゼツラン、団地や工場の片隅などで、よく見かけていましたが、最近非常に少なくなっているようです。

理由は、棘が非常に鋭くケガの原因になるために伐採されたり、あるいは昭和30~40年代に植えられた多くのアオリュウゼツランが、西暦2000年を境に開花し、枯れてしまったから、などが考えられます。

また、関西の住宅圏における植栽文化の変貌に目を向けてみると、どうやら時代時代、あるいは地域地域によって、植栽の流行というものがあったようです。特に関西では、団地が出現した昭和30年代頃より、カナリーヤシ、棕櫚(シュロ)、ユッカ、そしてリュウゼツランなどが、団地の中庭や個人邸宅で、好まれて植栽されてきた経緯が見られます。

では、当時の流行は、なぜこのような南国風だったのでしょうか？理由のひとつに、「宮崎新婚旅行説」というのがあるようです。昭和30年代~40年代の新婚旅行の定番でもあった宮崎の象徴「フェニックス」、つまりカナリーヤシを団地内に植えることで、新婚生活のスタート地点である生活空間に、楽しかった思い出を描いたということなのでしょう。

もうひとつは、「出身地思い出説」。当時大阪は、主に九州、四国、沖縄などからの就職者が多く、見知らぬ地に来て、安心して暮らせるような配慮だったのかもしれませんが。

今でも、大きな工場の入り口や中庭には必ずといっていいほど、フェニックスが植えられていて郷愁を誘います。

また、個人宅や工場の玄関に植えられるリュウゼツランは、ある意味権威や強さの象徴だったのかもしれませんが。これも大阪的発想のひとつだったのでしょうか。

現在、これら南国をイメージさせる植栽は、古い団地や工場でしか、あまり見かけることがありません。危険なリュウゼツランは、最近の流行であるヨーロッパ調のかわいらしいコニファーなどに変わり、街中での勇ましい姿を見ることも非常に少なくなってきました。